# 山口ゼミナール調査報告
## ～岡山県高梁市吹屋の歴史的町並みについて

国際日本学部　国際文化交流学科３年　熊谷 美吹

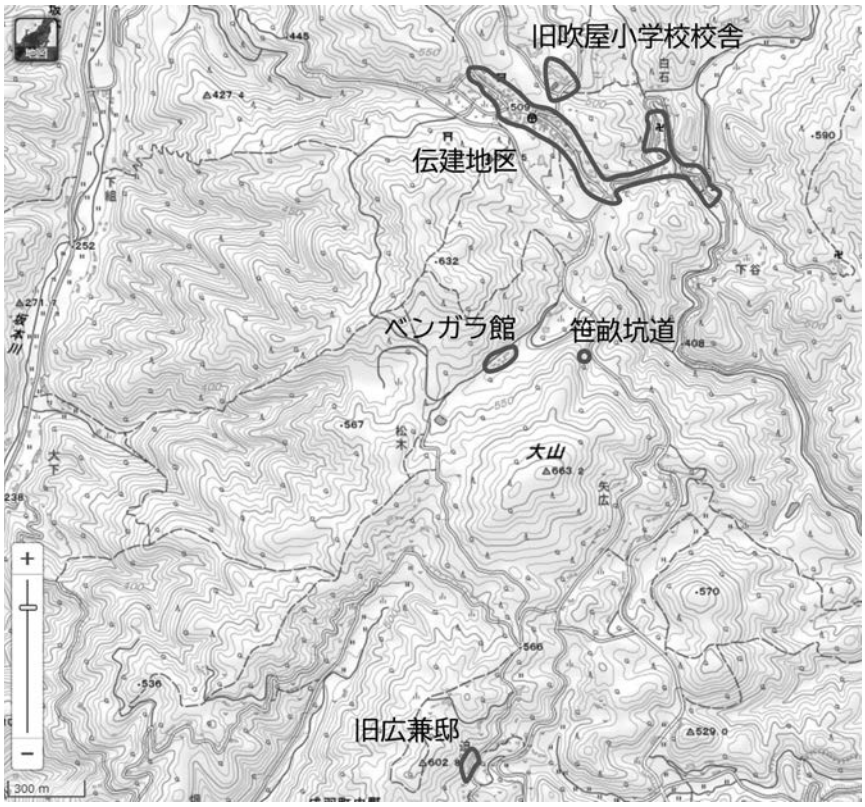
### はじめに

観光地理学を専攻する山口ゼミナールでは、２０２３年９月13日（水）～15日（金）にフィールドワーク（巡検）を行った。今年度は前期の文献講読を受けて、岡山県高梁市の吹屋と香川県直島町の直島を訪れた。ここでは14日（木）に訪れた吹屋の町並みについて報告する。

### 「赤い町並み」

吹屋は岡山県中西部・吉備（きび）高原上に位置している。かつて銅と弁柄の生産で繁栄した。もともとは銅山で栄えていた町だった。銅山で銅を発掘していた際に、外に放置されていたものが赤く変色しているのを職員が見つけた。これが硫化鉄鋼石で、弁柄の原料である。そして、赤色顔料となる弁柄の製造が本格化し、全国に出荷されるようになった。

鉱山町である吹屋は、赤い瓦と弁柄で彩色された格子を持つ家々が「赤い町並み」として知られ




吹屋の位置（地理院地図に加筆）

るようになった。吹屋は１９７４年に岡山県の「ふるさと村」に指定され、１９７７年には国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。吹屋の町並みを取り囲む山々の緑は弁柄色の町並みを際立たせている。現在では景観計画も制定され、自然的景観も保存の対象になっている。また２０２０年には「『ジャパンレッド』発祥の地―弁柄と銅（あかがね）の町・備中吹屋―」として、日本遺産に認定された。

吹屋の町並み

## 旧広兼邸

備中高梁駅から車で約50分。旧広兼邸駐車場で吹屋観光ガイドの戸田誠氏とお会いした。まず旧広兼邸を見学した。広兼家は、江戸時代後期に銅山経営と弁柄関連製造で財をなした。２階建ての大型主屋や土蔵・長屋等は１８１０（文化７）年のものである。石垣は城郭を思わせる大きさである。楼門の２階には見張り台が設置されている。吹屋の弁柄は焼き物に使っても変色しないほど質の良いものが作られたため、有田焼や九谷焼にも使われた。当時の商家は相当の儲けが出たことから、泥棒対策の設計が重要視された。

旧広兼邸の屋根に使われている瓦は１枚１枚色味が異なっている。これは竈の中の瓦の位置や、瓦に融液を浸けるのではなく撒いて製造していることによる。また離れの瓦は大正時代に作られ、製法も変わっていたため、主屋とは瓦の色が異なっていた。

旧広兼邸

## 笹畝坑道

次に銅山の旧坑道の一つである笹畝坑道を見学した。細く低い道をしばらく進むと広い空間に出た。銅山の岩は硬いので、梁がなくてもこのような広い空間を作ることが可能であった。

## ベンガラ館

今度はベンガラ館に向かった。ベンガラ館はかつての弁柄の製造工場を資料館とした施設である。弁柄の作り方を紹介しよう。銅山で取れた硫化鉄鋼石を煮つめるとローハと呼ばれる成分ができ、さらにそのローハをもう一度熱することで赤色が特徴の弁柄に変化する。

弁柄の製造が自然環境に影響を与えた点を説明しよう。弁柄を生成する過程で一度乾燥させる工程があり、その際に吹く風によって周辺の山が赤く染まり、亜硫酸ガスの影響で草木が生えなくなるなど周囲の自然に大きな被害をもたらしていた。また、弁柄は酸が含まれているときれいな焼き色が作れないため、水で洗い流す工程があるのだが、その排水による水質汚染も発生していた。

ベンガラ館

## 伝統的建造物群保存地区

### ・屋根・格子について

吹屋の家々の特徴は、「赤い」屋根と格子である。屋根は赤褐色の石州瓦（せきしゅう）で葺かれている。財力のあった商家では石見（いわみ）から瓦職人や宮大工を呼び寄せ、町屋を建築した。弁柄には防腐・防虫の作用があるため、多くの家々が格子などに弁柄を使用している。しかし、雨や長年の歳月を経て弁柄が剥がれ落ちてしまった部分も多々見られた。その中でも雨が当たらない壁の隙間などは弁柄特有の赤色を見ることができた。さらに吹屋の家々には弁柄を使用した赤い壁だけではなく、白漆喰のなまこ壁も部分的に使われていた。なまこ壁とは土蔵などに用いられる日本伝統の壁塗り様式の一つで、自然災害に強く、耐火性が高いことが特徴である。次に紹介する旧片山家住宅の土蔵にも白漆喰のなまこ壁が使われていた。

### ・旧片山家住宅

旧片山家住宅は江戸時代後期から弁柄の製造・販売に携わってきた豪商の家であり、２００６年に国の重要文化財に指定された。土蔵には弁柄に関する資料が展示されている。内部では、客間と居間の天井の高さの違いが見られた。戸田氏によると、客間の2階には人が入れないようにしてあり、また欄間のすき間を小さくすることで、商談の盗聴を防ぐ役割を果たしていたとのことである。

室内の階段は足場が狭く天井が低い特徴があり、泥棒の侵入を防ぐ役割を果たしていた。また階段そのものを隠す手段として押入れの奥に設置する方法も取られていた。この階段は窓のない屋根裏部屋に繋がっており、身を隠すための部屋として機能していた。

**・山神社跡**

山神社跡は、もともと吹屋の守り神として信仰されていた。１８７３年に銅山の経営が三菱鉱業の岩崎弥太郎に移り、これをきっかけに三菱鉱業が神社の願主となった。神社の玉垣や鳥居には三菱のシンボルマークを見ることができる。

**・旧吹屋小学校**

旧吹屋小学校校舎は、１９００（明治33）年に東西校舎、１９０９年に本館が建築され、２０１２年まで「現役最古の木造校舎」として使用された。設計は江川三郎八が担当し、明治時代後期を代表する擬洋風の学校建築として評価され、岡山県の重要文化財（建造物）に指定されている。見学してみると、建築に使われている木の香りや階段を上がる際の床のきしむ音など現代では感じられない昔ながらの雰囲気を感じることができた。

来訪時には、岡山県倉敷市に本社を構えるマスキングテープブランド「ｍｔ」とのコラボレーションイベントが実施されていた。校舎内の教室や三間廊下などがマスキングテープで彩られ、現代アートとして展示されていた。このことから吹屋での取り組みは「吹屋ふるさと村」だけにとどまらず、岡山県内他地域の企業も観光地化の促進を後押ししていると考えた。

旧吹屋小学校とイベント

## まとめ

今回の巡検を通して伝建地区に限らず景観を観察する際には、その地域と周辺との関係や歴史、そこで暮らしていた人々の背景などと照らし合わせて考えることの重要性を学ぶことができた。目で見える視覚的情報だけではわからないことも、地域住民の人々の生活とつなぎ合わせることで明らかになる部分も多く、様々な考察が生まれることを実感した。さらに、今回はガイドを依頼したことによって事前に読んだ資料や現地で入手したパンフレットなどに記載がなかった事柄についても知ることができた。実際に現地に出向いて見学をしたことは、資料を読んでいるだけでは知り得なかったことを学べ、とても意義のある経験であった。

**【付記】**

本報告は、現地で見聞きしたことと、入手したパンフレットなどをもとに作成した。末筆ながら、吹屋ふるさと村村長で、吹屋観光ガイドの戸田誠氏に感謝申し上げる。また、写真は全て教員の山口太郎が撮影したものである。